

## 環境資産としての農山漁村

藤本信義農村計画委員会委員長（宇都宮大学）

### 主旨説明

#### 1. 環境資産という言葉の出所について

学術推進委員会→自己評価、農村計画委員会の役割

指定文化財、伝建だけではない環境資産のリストづくりをするべきではないか「重村副学  
会長より」

#### 2. 環境資産の意義

→人間の居住空間を自然系、人工系、社会系という分類もできるが、未来への継承発展さ  
せていくべき地域的価値

あるいは人間居住の価値、アイデンティティを保つものとも言える

→希少価値に関わらない資産、環境への適用、維持管理システムの時代変化の中で掘り起  
こし、再認識していかないと消え去りかねない、未来に継承すべき資産となるのではない  
か

→資源、資産、遺産の違いについて

資源とは利活用されて資産となる

→資産の見方

○直接的価値、間接的価値

○マクロ「流域」、ミクロ

○環境問題思考、環境共存思考

○空間管理

○文化的景観

○負の遺産

「記憶を前へ」→継承性→環境資産の意味

大野啓一（横浜国立大学大学院）

### 「生態系・エコロジーの視点から」

生態学的価値の高い環境とは

自然環境が豊か

多様な生物要素

調和のとれた景観

環境資産としての植生

自然植生（非常に少ない）

代償植生（人間が作ったものでモザイク状に広がる）

自然植生

神社、海浜砂丘・海岸植生、河川沿い河畔林

代償植生

里山

杉・檜・赤松の人工林

屋敷林

生産緑地

2次草地

## 植生の価値とその評価

- 生態学的価値
- 経済的価値
- 生態文化的価値

## 植生の生態学的価値

- 自然性「植生自然度あるいは代償度」
- 生物多様性「種類数と複雑性」
- 地域固有性「潜在植生との関係」
- 希少性・絶滅危惧性
- 時間的空間的代償性
- 生態的能力「環境要領、緑地効果」

## 人間の影響度増大と代償群落度の関係

- 植生自然度表「10段階で自然度を見る」
- 裸地→極相まででは個体数は真ん中付近が最大（定期的伐採10－20年）
- 多層社会は環境能力高いが逆にゴルフ場は低い
- 水源涵養

## 里山2次林とは？

- 定期的な伐採や下草刈り等人為的管理下における代償植生
- 萌芽二次林
- 再生可能資源

## 森林の土地利用は作り変えが可能である

## 里山の危機（管理の人的資源の方が危機）

- 自然度 7－8ランク
- 地域固有性は高くない
- 生物多様性は中規模かく乱・管理下で高い
- 希少性、絶滅危惧性は低い
- 時間的代償性15－50年
- 空間的代償可能性も比較的高い
- 生態的能力は自然度にほぼ対応
- 植生は全土にほぼ対応

## 植物社会学的評価

## 2次林は環日本海に存在→類型化で海洋性と大陸性に分けられる

- どのように資産として位置づけるのか
- 大陸と日本を視野に入れるときの評価

## 里山2次林の再評価

- 間接的経済価値が高い
- 生態的価値高い（重要なビオトープ）

## 里山の将来像

- ・かつての里山2次林で循環型
- ・当該地域の潜在自然植生に任せる

## それ以外の自然環境資産の見方や評価の仕方

- 経済的価値
- 生態文化的価値

## 西川幸之（西川プランニングオフィス）

### 水環境・流域環境の視点から

#### NPO としての取り組み

- 個人を超えて社会的活動としての展開
- ビジョンを持つこと
- 現場を持って現場で対応

#### 特定非営利活動法人朝倉川育水フォーラム

- 目標「朝倉川に蛍を戻そう、人里づくり」
- ごみを捨てない
- コンクリートがないことが重要
- 都市が農村を包摂する
- 水源の山の保全活動、ごみ拾い、川に木を植える、

#### 特定非営利活動法人穂の国森作りの会

- 放置林
- 東三河地域の森林
- 12万ヘクタールで地域の3分の2が森である
- 人工林の80%が手入れされていない
- 間伐やメンテナンスをしないと死んでしまう
- 人工林のうち1割ないし2割しか手入れされていない（日本全体で）
- 1ヘクタール当たり蓄積年50万立方が、利用は5万立方以下である→負の遺産
- 林業政策のまちがい
- 年間50億円生産高→愛知県の林務予算150億円
- お金がポイントに落ちていない 土木的なことに使われている
- 林業は無理→メンテナンスフリー化
- 5ヘクタールしか手入れできていない（当該グループで）→焼け石に水
- 中央集権的仕組み（河川管理者が管理しやすいようにダムを作る等）を改める
- 仕様発注を性能発注に改める→現場の判断で必要な処置をする
- 公の概念が限界、行政だけでない公を
- 環境資産→バランスシートで考えるアイデア
- 流動資産、固定資産、負の資産等に分けてみる
- 資産－負の資産＝自己資本が残るか
- 地域のバランスシートを評価

## 中島熙八郎（熊本県立大学）

### 「生産の場と営みの技」

- ソフトの資産（技とか知恵）
- ささいなものが積み重なって農村を成立させる→消滅しつつある
- 鎌の使い方、棒の担ぎ方
- 体得した業 素晴らしい、伝承性→残しにくい→続かなければいけない

石が並べてあって頭首工になっている（洪水があれば流されるがすぐ再生可能）  
水をぬるませる必要がある→竹の筒→かけひ勾配によってぬるまるかどうかコントロール  
農道を水が流れている→水路がとれない→水路、農道兼用で問題はない

洗い場→コンクリートの余りもので代用→無償  
くわ、すき、もっこ等シンプルな道具→補修は自分たちで  
農道の舗装でも自分たちであるもので行う  
ハット漆喰→耐水性が高い  
田植えのマーキングのためのローラー  
田んぼがえぐれないようにやつでの葉っぱを置く

現場でかきあつめた材料で住民の手でつくる  
使う知恵を持っているかどうか（体得した技から発展的に出された知恵）  
自分たちが使いやすいものを使う（生業の中で伝えられ定着しているもの）  
お金はかかっていないが働きは十分な装置、空間  
近代的整備→公共事業→外部のある基準を使う（お金を使って外部から持ち込む）  
長年の間破壊されてきた→崩れようとしているときどうするか  
→当該技術がなければ直せない→直すことで技術も継承される  
→景観を守る整備するということに出来るだけそういう知恵と技を地元の人が出す仕組み  
→道具の共有（伝統的道具も現代の道具も）  
そういうムラでは若い世代も知恵と技を持つ

## 黒田武儀（日本民家再生リサイクル協会）

### 村の建物と暮らしの技（作手村に入村しての体験を通じて）

一姓、二姓.....二十姓....百姓への遠い道  
高原の大湿原→開墾することの意味を体験  
最も主張したいことは  
「百姓仕事で村をつくる、農村景観、誰がつくってきたのか→尊敬をこめて百姓」  
百姓は農業者のことだけではない（水のみ百姓で苗字を持つ百姓は北前船を持つ商人だった。）すなわち水田を持って租税を負担する意味であって、第二種兼業農家 大工、商業者、左官を含む→自分の暮らしは自分で面倒を見れる存在（自分のご飯くらいは自分で作り自分で家を建てられる）  
他人のために、河川管理、山を整備し道を管理し、国土を保全してきた→尊敬をこめて百姓。虫も植物も多様である日本の原風景  
農村の近代化→農産物生産だけでなく、副産物がいっぱい、どじょう、たにし、やつめうなぎ  
無数の蛇と対面、蛙の大合唱→うまく折り合いながら、駆除しようとは思わない  
「やぶかんぞうを荒らすな」「野菜をたって食える身分になったんだ。」  
田んぼの日常をビオトープという語を使う必要がない  
すなわち、内部からの目 農村の視点と我々は違う問題意識  
茅葺の民家調査（1960年）500万戸の茅葺民家が推計できた。現存する15万戸ぐらい。97%が消失  
百姓たちがその気にならなければ、配慮しようとする気にならなければいけない  
どうやって百姓という存在が生き残れるのか  
環境資産の中に身を置くことで得られた環境の外にいる人間と中にいる人間の意識の差異

## 寺口瑞生（松坂大学）

### 人づくり・地域運営の知恵

熊野古道の里と人

環境社会学10年ぐらい前からの学問である  
環境社会学における2つのスタンス

- ①環境問題として顕在化しているものを取り上げる
- ②環境問題として顕在化していないものを取り上げる

東紀州地域

伊勢湾文化、熊野灘文化、内陸文化

三重県の南北問題

熊野古道を世界遺産にしようという機運がある  
海、山があり人がいない地域

東紀州の点描（以下）：

秋刀魚漁 冬が本場

さんまの丸干し

さんま寿司

山中の巨岩

一面のみかん畑

紀和町丸山地区の棚田（環境ボランティア）

日本最古の神社

網掛け神事

灯籠 旅人の道しるべ

石畳

灯籠、地蔵（地元の努力で復元された古道）

峠の眺め

暮らしを楽しむ 浜辺のこいのぼり

休耕田に菜の花

老人たちの高菜栽培

みんなでウオーキング

郷土食の楽しみ

行政主導の活性化策

人材育成事業、東紀州活性化大学（まちづくりの勉強会）9年目

→電車1日5本ぐらい、国道1本の僻地

→地域の中で交流が少なかった

今地域にどのような人がいるのか→案外楽しくやっている→共有→連帯  
（楽しいことは皆で楽しむ、楽しいことを探す）

地域の宝もの探し→熊野古道もひとつ

地域の宝を皆で共有できるようになってきた

すなわち世界遺産の話为契机に、様々な意味・楽しみの方を見直すようになった

→世代間コミュニケーションの発生

世界遺産をきっかけに地域資源の活用→このような発想を持つ人が出てきた

地域暮らしが豊かになるということ

概念の精緻化をそんなに急がない方が宜しい

## 総合討論

鈴木（芝浦工大）

大陸性里山、海洋性里山の植生についての詳細を聴きたい。

山崎寿一（神戸大）

日本の農山漁村の生態的価値について、本当に健康なのか、日本の土は生活習慣病とされているが、健康な環境をチェックする仕組みが必要ではないか。理念先行ではないか。

大野（回答）

環日本海地域 コナラ林の特性

日本海洋性気候 コナラ林 照葉樹林

韓国 大陸性気候 コナラ林 コナラ自然林 等詳細を説明

生態系として健全かについて

循環型は破綻→不健全といえる。

地域条件によっては里山については正しい放置管理（自然の変移に任せる）が適用できるところもあり、密な管理が必要なところもある（環境保全という理由で）

鈴木（同上）

放置林の管理計画についてのお考えは

西川（回答）

メンテナンスしても経済的に成り立たない→一部の県では公的な資金を入れて強制的にメンテナンスしていく。そうでなければ公益的機能を果たせない

ビジネスモデル 中国人に手入れしてもらって間伐材を中国に輸出する（中国の住宅ブーム）

土木事業から山林整備事業への転換する人々も

メンテナンスフリーの天然林にすることも考えられる

補助金制度にのるからコスト高になる、自由競争による方が安い場合もある

川窪（大手前大学）

資産という考え方において、同じものでもある人にとっては資産、別の人にとっては負債となりうるケースがあると思うがその点どう考えるか

西川（回答）

判断基準を明確化するという事ではないか。人工林は放置林に比べればよいが天然林に比べると良くない→判断基準の明確化が数量化していくことが必要ではないか 環境会計 酸素ボンベで試算した例もある、何でもって判断基準を作るか。環境会計の手法が参考になるかもしれない

山崎（同上）

過去には、過疎といってもよそ者をはじき出すパワーがあった時代があったが、現在は地域パワーの低下で外部者が入れる余裕ができたという解釈でよいのか

黒田（回答）

排除の意思が感じられた。出るくいは打たれるというが、ならば打てないほど出すぎようとした。空き家30軒のうち1軒も売ってくれない貸してもくれない。

家が崩壊すると帰る必要がなくなるがそれまでは売らない。従って作手村における転入者13家族は全て新築している。過疎化が進んで、都市住民を受け入れると言わざるえないが、実は、村の人の意識は変わっていない、本心で歓迎している人はいないと思う。

西川（回答）

排除することはないと思うが、太鼓グループ、創作家具作家等一部は定着している。

ただし林業の新規参入に関してはヒエラルキーが存在しており、ヒエラルキーの末端に位置づけられる。人口はピーク時の半分になっているというのも事実。

東三河はもともと民間の動きが盛んな地域で、テーマ・目的は新しくなっていると思われる。

司会

これまでの議論は、

①環境資産そのものについての議論

## ②環境資産の担い手、コミュニティ

という具合に分けられたが、山崎の質問について中島に回答頂きたい。

山崎寿一（同上）

計画分野での環境資産は何に有効か、戦略的活用の展望は。

中島（前出）

我々の調査の資産を溜め込まないで社会化する責任があると重村氏

→環境資産という概念に至る

議論されること自体が成果である。研究分野、公共事業でのセクト主義が資産を分断してきた。立場の違いがあるが、国民共通の資産として位置づけられないと持たない。

それが共通資産としての契機。すなわち環境資産とはディテールも含めてトータルなものである。こういう認識は危機を迎えた中でのことであるが、認識は共通してきているので、表明をする段階だと思われる。

司会：

環境の内と外で意識のギャップがあるという話があったが、ギャップを埋めていく熊野の事例があった。環境社会学からの分析で参加型計画についてご意見を頂ければ。

寺口：

農山村の課題は国民的課題になってきた

都市と農村、地域住民、よそ者の過剰な意味づけはしないほうが良いのではないか

いかに関心と呼ぶのか 共感を持つ人間を増やすか、どれだけの人たちの共感を得たか。

暮らしの中身が大事である。

地井昭夫（広島大学）

家には3者が関わる。村の人、市民、先祖である。

すなわち、先祖がいるから手放せないのである。

しっかりとした環境目標をもち直接支払いを行っている事例も出てきた。

集落協定に非農家が入ってきているのは注目すべき、新しい担い手の可能性を持っているのである（一種の集落NPO）。

糸長浩司（日本大学）

環境資産の質と量に注目すべきである。

量が深刻である質で対応しきれていない。総量を見据えて解決策を議論する必要がある

人工林の混在化が新しい課題である→従来型では無理

→環境資産管理の総合性が求められる

→ご意見頂きたい

大野（回答）

地域性を認めるものであるべきだ（解決策は？）

例えばこちらへんはほっておけば照葉樹林に戻る等（生態系の動きを後押しする事業もある）正しい放置管理することが解決だが、手法は確立されていない。

西川（前出）

制度として担保するのはミスマッチで地域の条件に合わせて実施を考える。

フィンランドの例

林野庁の縮小と現場（森林所有者組合）に権限と情報を渡して経済原則に載せる。現場で決められるシステムにする。日本では、例えば、林道の整備箇所と管理箇所が結びついていないミスマッチがある。

重村（神戸大学）

不当に失われていく資産がある

ネーミングは大事ではないか

概念ができると皆大事にしなくちゃと思うようになる  
みんなにわかり易くする作戦ネーミングが大事（社会的に認知されやすい用語が必要）

副司会

図を追って見ながらまとめを試みた。

議論は、

- ①環境資産そのもの
- ②施策・制度
- ③その他一般

に色塗りされた。

大野先生の話

生態学的見地 生態学的に価値が高いとは、どのように評価されてきているのか  
環日本海という大局で考えるという新しい視野がある

中島先生の話

ミクロに農村の中にある感動的にうまくできているものがある。お金をかけないそこらへんにある、その地域の人々の知恵と経験、お金がなくてもなんとかなる。景観整備のとき利用できないかという話。

黒田先生の話

体験談中心で、百姓は農業者ではない。百姓とは広い主体を想定するときには使える概念ではないか。

寺口先生の話

人づくり系の話。寂しくなっているが楽しいこともよくみると再発見することがあるのではないか。地域の宝探し、よく見直すことが大事である。

西川先生の話

水環境、流域管理の話から人づくり社会システムへの話が大きく展開した。環境のバランスシートという話にインパクトがあった。どうしたらバランスが取れるか、公の概念、現場で考える、中央集権といった話があった。

総合討論の話

環境資産については、地元をベースに考えるが総体的なものであるが、まだ漠然としている。戦略的にはまだ漠然としている詰める必要がある。

加藤（地域環境プランナーズ）

自然環境の復元をやっている。15年ぐらいの歴史がある。

復元の技術

スモールイズビューティフル

経済による破壊 人間性にもたらす影響

大量生産ではなく、大衆による生産→正に農村で行われていること

だれもが持っている...よくはたらく頭と器用な手、大量生産は...暴力的...

30年前に提唱されているのであるが「中間技術」